

出張報告

「中国の宗教文化関連の施設の調査」

2014年5月20日から25日まで、北京市、登封市、西安市等を訪れ、それぞれの地で宗教文化関連の施設を見学した。

北京では1998年に世界遺産に登録された天壇を訪れた。21日には河南省の鄭州大学を訪れ、同大学に設置された宗道臣文庫を見学し、中国における日本研究の動向の一端を知ることができた。22日にはバスにて登封市を訪れ、少林希望小学校及び嵩山少林寺を訪問した。野外のステージで行う「禅宗少林音楽大典」を鑑賞し、翌日の早朝には少林寺方丈の釈永信師の案内で、境内で行われる僧侶たちの拳法の練習の風景を見ることができた。その後、龍門石窟を見学し、さらに西安市に向かった。

西安は、かつて長安の名で知られた中国の古い都である。紀元前11世紀に西周が都を置いて以来、10世紀初頭に唐が滅びるまでの間に、12の王朝が都を置いた。都が置かれていた年数を通算すると千百余年になるという。華清池では玄宗皇帝と楊貴妃の入った風呂の遺跡などを見た。

次いで、世界遺産になっている秦の始皇帝の兵馬俑に向かった（右写真）。この兵馬俑は1974年に偶然発見されたものである。何よりもこうした発掘の現場をそのまま公開していることを印象深く感じた。付置の売店の入口のところで、遺跡を発見し発掘作業に加わったという農民の一人が、サインを販売していた。

午後は、まず陝西博物館を見学した。ここ

も時間不足でゆっくりとは見学できなかった。その後西安の城壁を見学した。この城壁もなかなか見ものであった。城壁は東西約4.2キロメートル、南北約2.5キロメートル。自転車でサイクリングを楽しんだり、ジョギングをしたりする人を多く見かけた。北京の城壁は部分的にしか残っていないが、この城壁は長方形のまま残っている。

25日は帰国の日であったが、午前中のみ市内にある大雁塔を見学した。西遊記で有名な三蔵法師ゆかりの名所である。大雁塔は、唐代の皇帝高宗が亡き母を偲んで7世紀半ばに建立した慈恩寺の境内にある。玄奘三蔵が苦勞の末インドから持ち帰った膨大な量の経典を保管するために建立された。現在7層の構造で63メートルあるという。三蔵法師は晩年嵩山少林寺に行くことを所望したが、皇帝が許さなかったとのことである。

以上の調査地において、写真撮影及び映像撮影を行い、世界遺産関連のものは、宗教文化教育推進センター作成のデータベースにおいて利用できるようにした。

（井上順孝）

